地域の宝
但馬牛物語
★39★

人に伝える難しさ

渡辺　大直

但馬牛博物館のリニューアルオープンから4カ月がたった8月22日、来館者数が1万2千人を超えた。この間にゴールデンウイークや夏休みがあったとはいえ、県内外から多くの人が但馬牛博物館を訪れてくれた。

但馬牛博物館は、但馬牛や神戸ビーフのことを広く理解してもらおうとつくられた。そんなこともあって、来館者があると、私か小玉学芸員が展示室に出て、お客さんと言葉を交わすよう心がけている。

但馬牛博物館の展示室はワンフロア、ワンルームで、コンパクトだから、それぞれのお客さんが関心を持っていそうな展示がわかり、声をかけやすい。また質問や求めに応じた展示を紹介するのも便利だ。しかし休日や、イベントがあったり、団体が入ったりすると、すぐいっぱいになり、お客さんと話すのが難しくなってしまう。

お客さんと話していて気になったことがある。それは、「へェ～。そうだったのか」「初めて知った」という反応が多いことだ。

というのも、ほとんどの人が神戸ビーフや但馬牛という名は知っているが、何をもって神戸ビーフ、但馬牛、但馬牛というかとか、なぜ但馬牛は黒毛和牛の中でちょっと違う存在なのかとなると、全く知らなかったという人が極めて多く、こうした反応になる。

長年但馬牛の振興施策に携わり、各種イベントや神戸肉流通推進協議会をはじめ関係する諸団体のホームページ、マスコミなどさまざまな機会をとらえて情報発信して来たつもりだったが、ほとんど無力だったようにすら思う。

但馬牛博物館の展示コーナー

とはいえ、1時間近くかけて展示物をジックリ見て回る人があり、松阪牛など他のブランド牛肉、更にはAmerican Wagyu（アメリカ産和牛）やAustralian Wagyu（オーストラリア産和牛）との関連をきかれ、質問に次ぐ質問で、ついつい話し込んでしまうこともある。

また、展示物の写真を撮りたいという人も多く（当館では撮影OKとしている）、但馬牛や神戸ビーフのことを書いた冊子は販売していないのかと尋ねられることもある（残念ながらそうした冊子はない）。こうしたことからすると、神戸ビーフ、但馬牛、但馬牛に対する関心は強いようで、うまく伝えることができれば、理解を広げられそうに思う。

但馬牛博物館の展示を見て、わかりやすかったと褒められることもあるが、あんたの話を聞いてヤットわかったと、展示だけでは伝えきれていないことも知った。

人に伝えることの難しさを実感し、まだ改善すべき余地があることを知らされた4カ月だった。

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます